

## 〈短期海外派遣プログラム報告〉

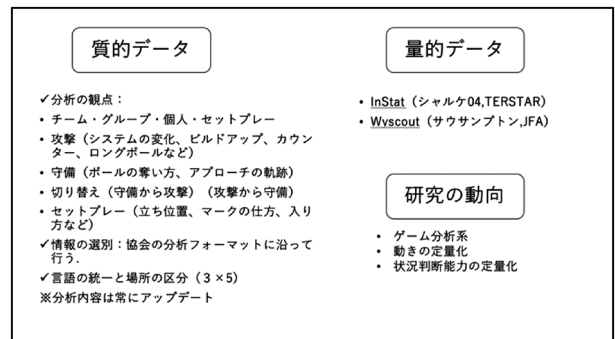
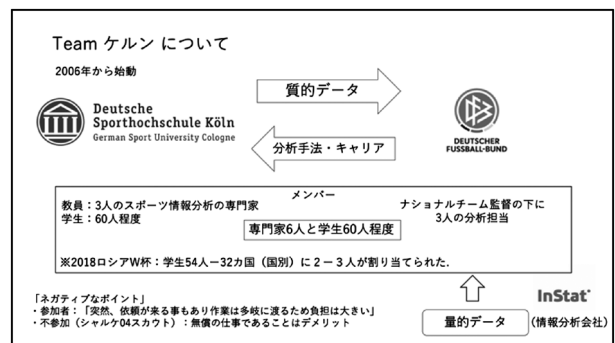
## 短期海外派遣プログラム報告

島崎 佑\*

## Report of the short-term overseas visiting program

Yu SHIMASAKI\*

1. 期間：2019年2月24日(日)~3月25日(月)
2. 研修先：ケルン(ドイツ)ほか
3. 訪問先：ケルン体育大学(ドイツ)競技スポーツコース スポーツ情報学研究室  
Alexander Otto氏(Instiuet fuer Trainingswissenschaft und Sportinformatik Raum 111)  
デウスト大学(スペイン)心理教育学部  
Lander Hernandez氏(Universidad de Deusto/Deustuko Unibertsitatea Avda. Universidades 24. 48007 Bilbao)
4. 研修内容：大学とナショナルチーム及び地域との連携に関する調査
  - 1) ケルン体育大学とドイツサッカー協会の連携(チームケルンについて)
  - 2) ドイツの育成年代のための取り組み(トレーニング器具の開発とフニーニョ)
  - 3) デウスト大学
  - 4) その他(体育施設, 授業改善)
  - 5) 全体を通して
    - 1) ケルン体育大学とドイツサッカー協会の連携(チームケルンについて)



2006年からケルン体育大学とドイツサッカー協会は、チームケルンを立ち上げ、ケルン体育大学からドイツ代表の対戦相手や質的データを提供している。サッカー協会としては、Instatsなどの分析会社と契約し量的データを入手しているものの、前後半の戦術の変更やシステム、個人の特徴などのデータは不足しており、これらのデータ入手には時間と労力を要するため大きなメリットがある。学生にとっても世界トップレベルの分析手法を学ぶとともに

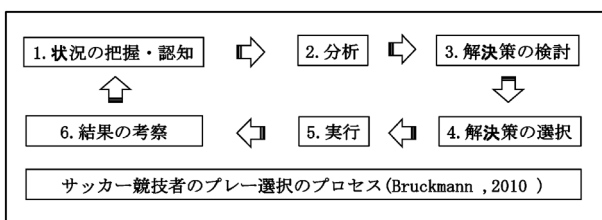
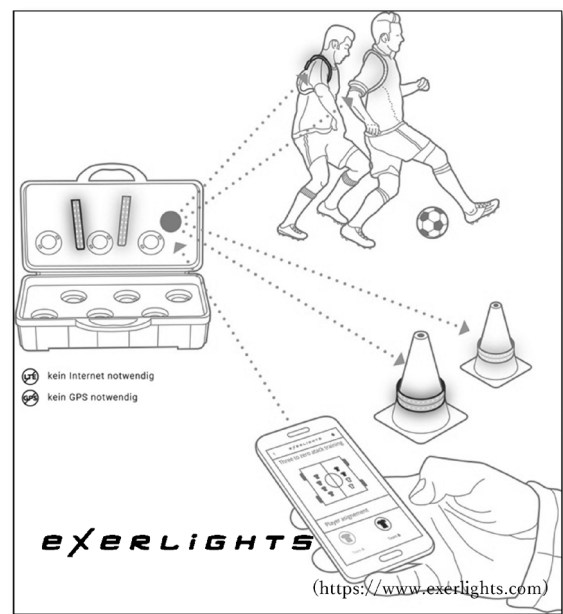
\* 順天堂大学スポーツ健康科学部スポーツ科学科球技コーチング学  
Team sports coaching science research room, Faculty of health and sports science, Juntendo University

に、ブンデスリーガのチームやサッカー協会への就職など、自身のキャリアにプラスになることがメリットとなっている。なお、学生の活動は無償で行われる。質的データは協会から要望された分析フォーマットにより収集されるため、学生はそのフォーマットに沿ってデータ収集をすることになる。具体的なフォーマットについては、次のヨーロッパ選手権やユース世代の代表の大会も控えている事もあり、提供してもらうことはできなかった。集められたデータは、サッカー協会を通じてドイツ代表の監督やコーチングスタッフに送られ、トレーニング、ミーティングに活用される。現代のサッカーでは、サッカーの1試合、1トレーニングにおける膨大なデータが収集されている。これらのデータは、1～2日という比較的短い時間でフィードバックされ、即座に選手の評価、スカウティング、戦術の立案に役立てられている。これからのスポーツ指導者には、データを収集し、適切に活用する能力が求められることが予想される。最後に、サッカーのゲーム分析の研究領域では、動きの定量化や状況判断能力の定量化が喫緊の課題となっている。現在、球技コーチング学研究室で計画しているGNSS・慣性センサと映像をリンクさせたゲーム分析を進めるとともにサッカー選手の判断能力の評価などに取り組みたい。

2) 選手育成のための取り組み。（トレーニング器具の開発とフニーニョ）

近年のドイツにおける選手育成に関する取り組みとして、トレーニング器具の開発とフニーニョと呼ばれるスモールサイドゲームについて知ることができた。まず、トレーニング器具の開発として、エクサライツと呼ばれる色が変わるビブスが注目されて

いる。エアランゲン大学のロホマン氏が開発に携わり、選手の状況判断能力を養成するために開発されたものであるとのことだった。選手のプレー選択は、認知→判断→実行の経過をたどると考えられている。したがって、状況判断の能力の養成は、認知から判断までのプロセスを改善することが狙いとなる。日本でもオシム監督が3色のビブスを用いてトレーニングをしていたことが知られているが、同様のねらいを持ったトレーニング器具であると思われる。サッカー指導にもアイディアを与えてくれる





情報であり、この分野の研究背景を抑えてサッカーの状況判断能力の評価やトレーニング効果に関する研究につなげたい。

一方、フニーニョは、ホルスト・バイン氏により提唱されたスモールサイドゲームの一つである。フニーニョについては、第16回日本フットボール学会においても取り挙げられており実際に視察することができた。状況判断やプレーの頻度など、育成年代の子どもたちがサッカーを楽しみながらプレーできるように、コートサイズ(25 m×35 m)やルール(スローイン無し)、ゴールの数(4ゴール)などが工夫されている。3対3で行われ、ドイツでは現在、普及活動がなされているとのことであった。昨年、実施した育成年代のスモールサイドゲーム(4対4)のゲーム分析とフニーニョの比較を行いたい。これらの知見は、日本の育成年代における重要な研究となる可能性があり現地の実施状況が視察できたことは大変、有意義であった。

### 3) デウスト大学

デウスト大学にてランデルエルナンデス氏と面会。ランデル氏は、デウスト大学法学部を卒業し、心理教育学部でサッカー・スポーツマネジメントの授業を担当する傍ら、スペイン1部リーグのアスレチックビルバオで育成カテゴリーのコーチングスタッフを統括する立場にある。またスペイン国内最高位の指導者ライセンスを付与することができるインストラクターとしても活動しており、日本で発刊されている指導書、サッカークリニックにおいても連載を続けている。今回は現地で指導者として活躍

している日本人サッカー指導者の紹介で引き合わせていただいた。ランデル氏は、現在、タレント発掘に関わるサッカー選手のスポーツ傷害に関する研究を検討しており、情報交換を行った。また大学間の情報交換や人的交流の可能性についても話し合い、今後も継続してコンタクトを取っていくことを確認した。

### 4) その他(体育施設, 授業改善)

#### ・体育施設

今回の研修では、ライプツィヒ大学やアヤックス・アムステルダム、デウスト大学のスポーツ施設についても視察を行った。実験室レベルでの測定だけでなく、屋内・屋外体育施設で、運動を簡易に測定できたり即時にフィードバックできたりする施設は少ない印象を受けた。参考になりそうな施設について以下に列挙する。

#### ライプツィヒ大学(ドイツ)

##### ・広い実験室

複数のトレッドミルやバイクが一室に設置されており、トレーニングルームのような実験室で実験が行われていた。

##### ・工作機械が設置されている部屋

おそらくスポーツ器具の開発や改良に役立てられていると考えられるが、旋盤や工作台が設置されていた。

##### ・プール

プールサイドに設置された複数台のカメラにより1レーンだけ映像が撮影できるようになっており授業などでも使用できるようになっていた。

#### アヤックス・アムステルダムのトレーニング施設(オランダ)

##### ・グラウンド横のトレーニング施設

人工芝のコート上にコートを区切るラインやラダーやアジリティトレーニング用のラインがペイントされていたりするなど工夫が見られた。斜度の違う坂道が2レーン、蹴上げの異なる階段が2レーン、砂場、バスケットゴール、1対1用ゲージやアスファルトのサッカーコートなどが併設されており、自由に子どもがそこで遊ぶような環境づくりも



行われていた。

**デウスト大学**

・トレーニング施設

トレーニングルームでは利用者がメールで自分のトレーニングを確認できたり、トレッドミルとインターネットが接続されたりとIoTを意識した環境づくりが進められていると感じた。

・欧州では一般的な人工芝グラウンドのスプリンクラーの設備も充実しており、体育館は湿度や室温管理のできる施設であった。

・授業改善

ケルン体育大学ではサッカーの授業内でUEFA Bライセンスの取得が可能となっている。その授業を受講した日本人学生から話を聞くことができた。ケルン体育大学でのサッカーの授業は、ドイツサッカー協会発刊のテキストを事前に学習してきていることが前提で、指導の実践におけるテーマのプレゼンテーション、口頭試問などがあり非常に負荷の高いものとなっているとのことだった。また指導の実践のテーマは、日本のB級ライセンスのものよりグループ戦術が細分化されており、非常にレベルの高いものであった。本年度、参加させていただいたUEFA Bライセンスの指導者講習も含めて勘案すると、非常に実践的でディスカッションが活発に行われることが予想される。本学の実習・演習においても学生のレベルに合わせたテーマを選び、ディスカッションやプレゼンテーションの機会を設け、指導

の実践の回数を増やすなどして現場で役立つ指導力を養えるよう内容を改善していきたい。また全ての国で、指導を学ぶ日本人の方々と話す機会があったが、指導理論が日本に比べ、細分化され言語とその解釈の定義づけについても整理されている印象を受けた。日本サッカー協会の指導者インストラクター研修においても現在、指導現場における言語の統一や定義づけは課題と考えられていたため、的確な指導言語の精査は今後の日本サッカーの課題となるかもしれない。具体的な指導方法として、近年、日本ではトレーニング中にリアルタイムでプレーを分析し具体的に褒めるコーチングの重要性が指摘されているが、ヨーロッパではそのような指導が当たり前に行われていた。スポーツ現場で活躍できる指導者や体育教員の養成という視点からも今回の研修では大きな収穫を得られた。

5) 全体を通して

今回、ドイツ、オランダ、スペインを巡り、最も印象的だったことは世界のサッカーのトレンドが5年前に比べ大きく様変わりしていたことであった。多くのチームがグアルディオラ氏の用いるポジショナルプレーを指向している様子が年代やレベルを問わずみられた。サッカーの進化が如何に早いかが肌感覚で伝わってきた。本当に貴重な経験であったと感じている。スポーツコーチングに携わる者として常に学び続け進化していかなければならないと痛感した。今回1ヶ月という長期間、サッカーの本場

で見聞を広げ、サッカー・大学関係者と交流できたことは、大学教員としての可能性や価値観を大きく拡げることに繋がった。このような機会を与えて

いただいたことに感謝し、本学の学生の成長と発展に貢献できるよう努力していきたい。ありがとうございました。